

【1120 緩和ケアリンクにいがた定例会参加者アンケート】

*自分の余命を知り、自宅へ戻られる患者さんの心の動きや、退院後の、最期に向けて着々と準備を進める様を知り得て、とても良い経験でした。様々な方の発言で（エピソードの積み重ね）Aさんの姿が立体化して（母も）色がついて、表情が現れ出る様がおどろきでありました。自然体で、笑顔で、関わったお互いも知らなかつたエピソードを交換するのは、講堂に居あわせた全員へのグリーフケアだった。

*多職種によるカンファレンスで、各専門職の方々の役割を知ることができたことが大変有意義でした。Aさんという方の人物像や、どんな様子で病院・ご自宅で過ごされていたのかが多数の方の言葉を通して生き生きと描かれる感じがして、ケアに参加しているような気持で聞かせていただきました。特に病院主治医のAさんに対する想いや、Aさんとの対話を知ることができ、主治医の想いを聞く機会を病院ではなかなか持てていないため、機会をもてるとスタッフ間の距離が縮んでいくのではないかと思いました。

*Aさんは、ご自身を冷静に、周りも含めて客観的に見て判断、意思決定をしていたとうかがえた。チームの中に、尊厳の姿勢があり、最後までその点が緩まなかつたことがうまくいった点と思われました。在宅主治医に対しても、受け入れていたから身なりを整えて待っていたのではないかなあと感じました。親子の絆と、自然に寄り添っている様子と、周りのすばらしい連携支援を受けられたことは、Aさんにとっては、幸せな時間だったと思います。心の方向・想いが同じことが大切であると思いました。人は死に向かって生きている訳で、XX歳という若さではあったと思うが、Aさんらしく生ききつたのではないかでしょうか。

*自分で動けなくなっていくことを予測し、その前に自分の車を処分する。すごい決断だなあ。でもこれもお母さんに迷惑をかけたくないという想いからなんでしょうね。順番通りに死を迎えることができなかつた母親を思いやる優しさ、自分がつらい状況なのに。私自身も一人息子なので、同じ状況になつたら息子はどうするかな?とも思いました。TS-1をもう止めると決断した時の心境は…。腰の曲がったお母さん、人生の大先輩として見習いたいなと思いました。「あきらめ力」もうなづけました。カンファレンスを傍聴するという貴重な体験ができました。

*途中でギャラリーに意見・質問を設けてもらうと、より情報が深まったような気がします。

*Aさんに合わせた支援。希望したことをどんな風にみんなで支えるか?を考えながら、いろいろな職種が関わることはとても難しいと思うけど、その人のことを思い、ていねいに接することの大切さを改めて考えることができました。当ステーションのデスカンファレンスは「もっとこうすればよかった」ばかり考えることが多かったが、これからは今回みたいにその方の想い、どういう人だったかということを振り返ることも行っていきたいです。

*病棟看護師に在宅の目線があると、もう少し在宅療養できる方が増えるのではないか?病院ではできない多様性のある生活が、在宅生活において営めており、自律の強い方であつたため、最期まで在宅にいられたのかと思う。入院中も在宅中も多くの職種がうまく連携できたことがよかったです。このような会を続けると病院内の考え方方が変わらるのかなと思いました。

*多職種の人、それぞれの話を聞いて、Aさんの人となり、スタッフの想い、などが目に浮かんで興味深かったです。

*デスカンファレンスは必要でも、なかなかできないですが、色々なことを共有できることで大切、と思いました。改めて色々なことに気付けたり、知らないことを知れたり良い時間でした。

*病棟⇒在宅の多職種の連携がとても慣れている様子で、明るいプレーが、お聞きしていく気持ちよいです。Aさんご本人が自身の状況を理解し、自分を大切にしている方と思いました。メンタルの強さがあるのでしょう。莊厳なかたと感心しました。

*家で過ごしたいという想いに、それぞれの職種の方が、連携しながら一生懸命に応えようと働いていらっしゃることがよくわかり、感動しました。末期の方でもこんな風に最期を過ごされる能够るようにこれから努力していかなければと思いました。

*カンファレンスはいつも参加しているが、最初から最後まで通して聞くことができるカンファレンスは、振り返りや次回に活かすための反省や工夫が感じられてとても勉強になった。ご本人様・ご家族様の気持ちの変化、ずっと思っていたことが徐々に明らかになっていく経過、すべてが終わった後のご家族の想いはこのような機会がなければ知ることができない。今後も時々このような内容で開催してほしい。

*病院関係者の方が、在宅に戻るという方向で支援をしていくことを提案してくださったことが、とてもA様にとって良かったのだと思います。病気になると色々な事を我慢して治療に望みをかける為、なんとか病院とつながっていて、苦しい治療をすることで生きる希望を持つ。一度在宅に戻れたことで、自由に生活できる事に気づけ、最期まで家で過ごせたのだと思います。何より多くの方の支えがあったのが、A様・お母様にとって心強かったのだと思います。今日はとても勉強になりました。ありがとうございました。

*実際の経過中にはわからなかった関係者の想い、気づかなかったAさんの一面に改めて触れることができた。同じ話し合いを聞いてもそれぞれ異なるフロアの方の着目点も新鮮だった。フロアの意見をもう少し聞く時間があるとよかったです。

*デスカンファレンスに参加させていただき、終わる頃には、本当に心暖まる感じが私の中

にも残りました。本人・家族が想いを伝えたいと思った時に、それぞれがよいタイミングで対応できた事、必要な時に必要な人や物が入ったこと、何より皆さんが2人の思いに傾聴できたことは、皆さんの話の中でエピソードが次々と出てきたことで十分伝わってきました。皆さんの連携の良さが、本人・母の安心感となり、思っていた以上に在宅が居心地よくなつたのですね。私たちもそうありたいと願いつつ、本当に勉強になりました。ありがとうございました。

*強い主張があるわけではないけれど、振る舞いに一貫性があり、かつ、感情を正直に表現されるAさんを感じ取りました。サポートメンバーはAさんを正しく理解したから、結果、プレのない連携になったのだと思います。サポートを一段バージョンアップするタイミングで、すぐカンファレンスを開いているところはさすがだと思いました。在宅の可能性を感じました。事例を丁寧に振り返る試みはとてもよいと思いました。フロアの方々の感想をもっと聞きたかった気もしました。ありがとうございました。

*支援者の皆様の思いが、ご本人・お母様の強さを引き出していると感じられました。本人が望むこと、限界を決めるのは本人のみ。そこに寄り添う支援ができた事が、最高のご本人へのプレゼントだった様に思います。母、子という関わりより、個としての存在であった関係であったように映ってもいました。母、子という存在以外に個としての支援でもあったと感じました。

*病棟—訪問看護—薬剤—医師の連携がみえたカンファレンスだった。一つのケースを振り返ることにより、分析でき、共有でき、次のケースへと活かせるのではないかと思いました。会場の雰囲気がとてもよかったです。

*今回のデスケースカンファレンスは、それぞれの職種からの関わりを聞くことができ、とても良かったです。皆さん一人一人の、Aさんの思いを大切にした関わりが、Aさんが自分が、その度、こうしていきたいと思ったり、判断したり、抗がん剤も自分からやめると決断したりと、Aさんの生き方につながったのだと思います。家で大変だったら病院へ戻ればいい…とAさんも考えていたかもしれないけれど、皆さんとの援助関係で、Aさんらしく最後まで生きることができたのだと思います。今日は参加できてよかったです。

*事例提供の皆さん、お疲れ様でした。デスカンファ、新しい試みでいろいろ考えさせされました。デスカンファは根本的に、亡くなった患者さんには何も還元することができないでデスカンファの意味が重要と思っています。その時点では気づけなかった言葉や行為を振り返りによって意味づけることが目的ではないかと思っています。その点で、Aさんの事例で、Aさんにとっての「在宅の意味」が変わったこと、それを支えることができたのが何だったのかが、心に残りました。また、勉強しに来ます。

*Aさんやお母様の、その時々の想いに、関わった皆さんのが寄り添っている様子が伺えて、あたたかい思いでいます。対象の方や、経過は異なっても、こんな支援の在り方を、また、関係者同志のつながりを目指せたらと思いました。今日は、よい機会に同席させていただき、ありがとうございました。

*在宅での様子を病棟にフィードバックできて、とても良かった。在宅と病棟とこのように情報を交換できるとよい。「腹をくくる」→病気と付き合う最大の武器か。人は弱い、けど強い。

*事例の方の像は、想像しやすく思いました。感想を言わせていただきましたが、入院・訪問看護・薬剤師・そして先生、すべての協力と思いが良い方向へと向かわせたと思います。遺族へのMSWの傾聴もすばらしい！です。

*大変ありがとうございました。訪問看護をしています。ケースカンファレンスをお聞きしながら、あたかも自分も訪問看護で訪問しながら、Aさんにケアをしたり、お話を聞きして、Aさんの人となりを感じたりしたかのように疑似体験させていただきました。自分の経験とも照らし合わせながら、いろいろな職種の方の関わりの良さや、暮らしを続けていくことの大切さ、家族の心の結びつきを強く感じ、とても心に残りました。またよろしくお願ひいたします。

*なぜ連携が必要なのかがわからない、というケアマネもいるという噂を聞きました。このようなカンファレンスの場面、ご家族の声を聞けば変わるはず！！と思いました。

*今日の話は、地域で人を支えることが、医療～生活モデルでの支援となったと思います。患者力を育てることは、できないことや疾病に目を向けるのではなく、できることを支援することかと思います。全快堂さんが早朝に薬品を届けることや、訪看さんが入浴をすりガラスの前で待つことなど、本当に鮮やかに目に浮かびます。よいカンファレンスをありがとうございました。